様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００５５４

研究課題名（和文）中国語版ドチリナ・キリシタンのデジタルアーカイブス化とその語学的研究

研究課題名（英文）Digital archiving of the Chinese version of Dotilina Christiana and its linguistic research.

研究代表者
内田　慶市（Uchida, Keiichi）

関西大学・東西学術研究所・客員研究員

研究者番号：６０１１５２９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：今回の研究では、先ず、デジタル化に関してはコロナ禍の影響もあって、資料が国外のものであり、思うように進めることが出来なかった。その点は残念であったが、それでも、広く中国語訳聖書やドチリナの周辺の資料、例えば、教義書や聖像画に関する研究は書籍の形でまとめることが出来た。特にドチリナなどのキリシタン教義と深く関わる「拝客問答」「拝客訓示」に関する研究は想定外の成果を得られたように思っている。研究期間は終了するが、残されたドチリナ関係のデジタルアーカイブについては、これからも申請者が所属する東西学術研究所の1つのプロジェクトとしてまとめていきたいと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ドチリナ・キリシタンや聖書は東アジアにやって来た宣教師が必ず携えてきたものである。元はラテン語等の欧米の言語で書かれていたものを、中国語や日本語に翻訳していったわけであるが、翻訳とは単に言葉の置き換えではなくて、実は双方の文化の差異を如何に表現し直すかという、いわゆる「文化の翻訳」という側面を持っている。そして、宣教師、とりわけイエズス会の宣教師は「相手の文化に身を置く」という極めて「謙虚」な態度を採用した。こうした翻訳観の問題を漢訳キリスト教文献から取り扱ってきたが、これは､現代にも通じる重要な見方であり、そうした観点からの成果は学術的、社会的意義は極めて高いものがあると考えている。

研究成果の概要（英文）：In this research, first of all, we were not able to make as much progress as we would have liked with regard to digitisation, partly because of the Corona disaster and partly because the materials were from outside the country. Although this was disappointing, we were nevertheless able to compile a wide range of research into Chinese translations of the Bible and materials from the Dotilina area, such as doctrinal books and iconography, in the form of a book. In particular, I feel that my research on the 'Worshipful Questions and Answers' and 'Worshipful Instructions', which are deeply related to Christian doctrines such as the dochilina, has yielded unexpected results. Although the research period is coming to an end, the remaining digital archives related to Dotirina will continue to be compiled as one project of the East-West Scientific Research Institute, to which the applicant belongs.

研究分野：東西言語文化接触

キーワード：文化交渉　言語接触　翻訳観　宣教師　キリスト教　聖像画　文化の翻訳　東アジア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで研究代表者は近代における東西言語文化接触の研究を 20 数年来継続してきている。とくに、近代中国語の形成と変化に関する研究においては、それまでの研究者が主に中国人の手になる中国域内での資料を取り扱ってきたのに対し、研究代表者は彼らがそれまで扱ってこなかった資料、すなわち中国人以外の手になる「域外資料」を中心に研究を行い、多くの新しい知見を発信してきた。それは、そうした域外資料が母国語話者には自明すぎて当たり前の事象が目の前に現れてくるからである。物事の本質は, 中心からよりも、ある場合には、周縁から見えてくるという、まさに「周縁からのアプローチ」の有効性を示すものである。もちろん、欧米ではすでに古代ローマ時代から言語学という学問が確立し、科学的な方法で言語を研究してきたという背景もそうした資料の可能性、有効性を裏付けるものである。

なお、こうした方法は現在では広く学界では認知されてきており、中国の研究者たちもこの方法や資料を駆使した研究を盛んに行うようになってきている。

さて、そのような方法により、研究代表者は西洋人の宣教師による中国語研究について長年研究してきており、「近代欧米人の語法研究」「欧文資料にもとづく語彙研究」「欧米資料にもとづく官話・方言研究」「近代欧米人の中国語研究の価値とその可能性」「モリソンが元にした漢訳聖書」等々多くの論文を発表し、また『近代における東西言語文化接触の研究』(2001)『文化交渉学と言語接触ー中国言語学における周縁からのアプローチ』(2010)などの著書をまとめてきた。その中には「近代中国語の文体」に関する論考も含まれるが、「漢訳聖書」を中心にまとめたもので、まだまだ不十分な面も残されている。今回は、その不足を補うべく、新たに「中国語版ドチリナ・キリシタン」という、これまでほとんど手が着けられていなかった資料を基に、近代中国語の文体の本質を解明しようと思い至った。

同じく、研究分担者の奥村佳代子と塩山正純も、これまで研究代表者と同様な問題意識を持って近代中国語の研究を続けてきており、国際シンポジウムなどにもほとんど共に参加発表をしてきている関係である。

奥村の場合は、江戸時代の唐話や琉球官話の諸相と近代中国語との関係を中心に研究を行っており、『江戸時代の唐話に関する基礎研究』(2007)や『唐話課本五種』(2011)という著書も刊行し、唐話における「雅」と「俗」といった文体の問題もこれまで扱ってきている。最近は更に、西洋人宣教師の雍正帝時代の「供述書」などを取り扱って、その文体についての研究も始めている。

塩山はこれまで長年にわたり漢訳聖書の研究を行っており、多くの論文や『初期中国語聖書の系譜に関する研究』(2013)を著しているが、特に、ディアズによる最初の文言訳聖書「聖教直解」とバセの文白混交体の「四史攸編」そしてモリソンの「神天聖書」の三大漢訳聖書における語彙の継承関係や文体の差異に関する研究は、学界から高い評価を受けている。

最近は更に、新しく発見された白話体の「古新聖経」に関する研究も開始している。

こうした研究分担者との頻繁な交流の中から, 今回共通のテーマを設定し共同研究するに至った。

２．研究の目的

近代中国語の語彙、文法に関する研究は、これまで長い研究の歴史の中で多くの研究者によって優れた成果が挙げられている。ただし、近代中国語研究史の上で「近代中国語の文体論」という点に関して言えば、それほどまとまった研究成果というものは見られてはいない。その理由としては、母国語話者（すなわち中国人）にとっては自分たちの「文体」について「自省」する機会が少なかったということや、そもそも、書き言葉と話し言葉の違いの明確な意識が生まれたのが五四文学革命以降であったということが挙げられる。これに対して、欧米人、とりわけ 16 世紀以降の「西学東漸」の担い手であった宣教師たちは、こうした「文体」の違いに関して極めて敏感であった。それは彼らが布教の目的を果たすため、相手方の言語や文化にとことん執着したことによる。すなわち、彼らは、中国や日本を中心とする東アジアの人々がキリスト教を容易に受容するために、どのような文体で聖書を始めとするキリシタン文献を中国語や日本語に翻訳すべきかという点を考慮したからである。それは、いわゆる「適応主義」の表れでもあるが、マテオ・リッチ以降早くから中国語の文体の大まかな特徴について記述してきている。

もちろん、中国側からの資料でも、特に宋代以降の朱子や仏教関係の語録体、あるいは明代の旧白話小説や直解類といわれるジャンルの文体は話し言葉を元にしていることはこれまでも言われてきた。たとえば、直解類について「あのような文体、すなわち文語・口語の混交体が口頭語としても存在したことにもはや疑いはない」（古屋昭弘「明代知識人の言語生活」1993）というようなことは指摘されていた。しかしながら、特にヨーロッパの宣教師たちは早くから敏感にその違いを嗅ぎ取ると共に、その言語学的素養を背景にして、中国語の文体を真正面から取り上げ、その中身について一定程度の科学的な記述を残してきた。たとえば、ド・ギーニュや、それをさらに発展させたロバート・トームを始めとして、メドーズやレミュザ、ハースなどの研究がそれである（内田慶市 2010「近代欧米人の中国語文体観」を参照）。そして、彼らの残した中国語の資料の中で、量的にも質的にも中国語文体の研究に有効で重要なものは漢訳聖書と「ドチリナ・キリシタン」を始めとする「聖教要理」類である。このうち、漢訳聖書に関してはこれまですでに多くの研究が現れているが、後者の「ドチリナ・キリシタン」に関してはほとんど研究がなされていない。今回の研究ではこの「ドチリナ・キリシタン」に焦点を当て、その文体的特徴、近代中国語史上における位置を明らかにすることを目的としている。

ところで、本研究ではこうした語学的研究を行うための基礎的作業として、中国語版「ドチリナ・キリシタン」のデジタル化、アーカイブス化を行うこともその目的の一つとしている。

文献資料のデジタル・アーカイブは今や世界的な流れであるが、デジタル化、アーカイブス化はそれ自体が最終目標ではない。それはあくまでも研究のための一つの手段に過ぎないのであるが、今回は先ずは世界に数多く散在する「ドチリナ・キリシタン」の版本をできる限り収集し、それをデジタル化し、更に、それに対する書誌情報を付加して公開する。また、それらの文献を電子テキスト化し，全文検索を可能とすべく「ドチリナ・キリシタンコーパス」を構築する。そのことで、「ドチリナ・キリシタン」の文体的特徴や語彙、文法特徴の研究が容易になるはずである。

３．研究の方法

研究代表者と共同研究分担者が常に緊密な連絡を取り合い、各資料の整理収集、デジタル化、テキスト入力等を行い、随時、関西大学アジア・オープン・リサーチセンターのデジタル・アーカイブに公開していく。

具体的な流れとしては、以下のようである。

A. 研究会

関西大学および愛知大学において 3 ヶ月に 1 回研究例会を開催し、また外部の研究者を招いての研究大会も年 1 回開催し、各自の役割分担にもとづく研究成果を発表するほか、進捗状況を確認する。

B. 海外調査

海外（ローマ及びバチカン）での現地調査は下に掲げる海外研究協力者のローマ大学のマシーニ教授とバチカン図書館の余東氏の協力の下、カサナテンセ図書館、ローマ国立図書館、イエズス会文書館、ウルバナ大学プロパガンダ・フィーデ図書館、バチカン図書館を中心に行う。

C. 各資料のテキスト入力

D. 各資料の系統関係と文体的特徴の分析

また、研究体制と役割分担は以下のものとする。

研究代表者：内田慶市　総括・「ドチリナ・キリシタン」の語学的研究

研究分担者：

奥村佳代子　唐話の文体および日本語版「ドチリナ・キリシタン」との比較対照

塩山正純　　漢訳聖書の文体との比較対照

海外研究協力者として、次の研究者および図書館員から内諾を得ている。

フェデリコ・マシーニ　イタリア・ローマ大学サピエンツァ東方学院教授

余東　　バチカン図書館東洋部主任

４．研究成果

以上のような研究計画を立てていたが、コロナ禍によって、十分な活動が出来なかった。特に、今回扱う資料はほとんどがイタリアに所蔵されているものであり、海外渡航が 2 年目から制限されて思うような資料収集、デジタル化を進められなかったことは残念である。

ただ、そういった厳しい環境下でも、宣教師によって作られた各種資料（『拝客問答』『拝客訓示』『キリスト教要理のローマ字本』等々）の影印出版やそれらの詳細な研究は学界での大きな評価を得ている。また、「東西文化接触」の具体的な具現化である「聖像画」の東アジアへの伝播と変容に関する国際シンポジウムを開催し、その成果を公刊したが、これも関係研究者に大きなインパクトを与えている。

今後、更にこのような資料の収集とデジタル化に力を注いでいきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

内田慶市

[著書]

『『拝客訓示』の研究』、内田慶市編著、関西大学出版部、2019 年 3 月、総 244 頁。

『南京官話資料集―《拉丁語南京語詞典》他二種』、内田慶市編著、関西大学出版部、2020 年 3 月、総 488 頁。

『造洋飯書の研究―解題と影印』、内田慶市編著、関西大学出版部、2020 年 3 月総 350 頁

『東西文化の翻訳のかたち―聖像画の変容を中心に』, 内田慶市編著、関西大学出版部、2021 年 3 月、総 300 頁

『北京官話資料8種「京華襍拾」-解題と影印・語彙索引』,内田慶市編著、関西大学出版部、2022

『古新聖経残稿二種北堂本與満漢合璧本』、内田慶市・李爽學共編著、関西大学出版部、2018 年 12 月、総 360 頁。

『言語接触研究の最前線（東西学術研究所研究叢書第 8 号）』、内田慶市編著、ユニウス、2020 年 2 月、総 133 頁。
『『華英通語』四種–解題と影印』、内田慶市・田野村忠温共編著、関西大学出版部、2020 年 3 月、総 661 頁。
『北京官話資料 8 種-『京華雑拾』解題と影印・索引』、関西大学出版部、2022 年 3 月、総 374 頁
[論文]
「KU_ORCAS－オープンプラットホームが切り拓く新しい人文知の未来」、『中国 21』Vol.51、東方書店、2019 年 12 月。
「羅伯聃對漢語語言學的貢獻」、『西士與近代中國：羅伯聃研究論集　ロバート・トーム研究（研究と影印）』（内田慶市・沈国威編）、関西大学出版部、2020 年 3 月、1-32 頁。
「満漢文献資料の内外の所蔵状況について：中国語学研究の立場から『石濱文庫』満洲語文献を中心に」『東アジア文化交渉研究』第 13 巻、2020 年 3 月、721-732 頁
「域外汉语资料对于“ 南京官话 ”研究的可能性」『国际汉语教育史研究』**第 1 輯、2020 年 7 月、22–39 頁。**
「文化交涉學與語言研究」『國際漢語教育史研究』第 2 **輯、2020 年 12 月**
「中国語教育と検定試験」『中国語教育』第 20 号、17 頁-26 頁、2022 年 3 月.13–30 頁
「KU-ORCAS の目指してきたもの―併せて今後の展望」**『関西大学が開くデジタル化時代の東アジア文化研究**"Open-access platform of KU-ORCAS, Past, present and future"』35-46 頁、2022 年 3 月
「**漢**訳聖書研究の新たな地平を目指して–永井宗弘・塩山正純編**(2021)**『ラサール訳–研究と影印・翻刻–』に寄せて」**『愛知大学国際問題研究所紀要』158 号、219-225 頁、2021 年 10 月**
奥村佳代子
[論文]
「キリスト教案における尋問と供述の言葉　福安教案の西洋人宣教師の事例から」『内田教授退職記念論文集　文化交渉と言語接触』、143-163 頁、2021 年 2 月
「江户时代唐话的文体变遷ー《譯家必備》和岡嶋冠山的唐話资料」《国際汉漢語教育史研究》**第一輯、76–89 頁、2020 年 7 月**
塩山正純
[著書]
『ラサール訳『嘉音遵口罵口挑菩薩之語』ー研究と影印・翻刻ー』共編（永井崇弘）あるむ、379 頁、
2021 年３月
[論文]
「東亜同文書院生の思い出に記された厦門―大正期以前の『大旅行誌』の記録を中心に―」『愛知大学国際問題研究所設立 70 周年記念論集・愛知大学国際問題研究所叢書第 4 期第 4 冊『グローバルな視野と個性とのバランスを考えるローカルの思考』pp.225-241、2020 年３月
「從倪戈氏《耶穌教官話問答》窺看十九世紀中葉的「官話」—兼論與《古新聖經問答》**一書的比較—」《國際漢語教育史研究》第 1 輯 商務印書館、pp.62-75, 2020 年 7 月**
「M.F.Crawford 著『造洋飯書』(1866)が調理を表現した中国語―動詞と量詞、時間表現を中心に―」関西大学中国文学会『関西大学中国文学会紀要』42 号、pp.67-82、2021 年３月

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 内田慶市	４．巻 0
２．論文標題 羅伯tan;對漢語語言學的貢獻	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西士與近代中國：羅伯tan;研究論集　ロバート・トーム研究	６．最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田慶市	４．巻 13
２．論文標題 満漢文献資料の内外の所蔵状況について：中国語学研究の立場から『石濱文庫』満洲語文献を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東アジア文化交渉研究	６．最初と最後の頁 721-732
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田慶市	４．巻 1
２．論文標題 ROBERT THOM對漢語語言學的貢獻	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『西士與近代中國：ロバート・トーム研究（研究と影印）	６．最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Keiichi Uchida	４．巻 1
２．論文標題 The Chinese Traditional Method of “Full or Vacant Characters” and the Grammar of Port-Royal	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Reading the Signs: Philology, History, Prognostication; Festschift For Michael Lackner, iudicium,	６．最初と最後の頁 221-236p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　6件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 内田慶市
2．発表標題 漢訳聖書の様々な可能性
3．学会等名 日本中国語近世語学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 内田慶市
2．発表標題 南京官話に関する新資料について」
3．学会等名 中国語近世語学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 内田慶市
2．発表標題 關於南京官話的資料
3．学会等名 近代言語接触研究学術会議（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 内田慶市
2．発表標題 關於南京官話研究的資料
3．学会等名 世界漢語教育史研究学会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 拝客問答及其他
３．学会等名 何以“人“、何以“文”—明末至近代中国文化与両度西潮」国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 東アジア文献アーカイブの現状と課題
３．学会等名 東アジア文化交渉学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 近代東西言語接触史の展望
３．学会等名 近代東西言語文化接触史学術会議（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 明治維新期の英語学習と何礼之について
３．学会等名 中国近世語学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 域外漢語資料の可能性
３．学会等名 「中国と世界」学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 石濱文庫の満州語関係資料
３．学会等名 東西学術研究と文化交渉－石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 KU-ORCAS-開放式研究平台開闢的新的人文知的未來
３．学会等名 世界漢語教育史研究学会第10回大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 内田慶市
２．発表標題 近代東西語言接觸史研究的過去，現在，未來
３．学会等名 近代東西言語文化接触史研究ワークショップ（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

1．著者名 内田慶市	4．発行年 2021年
2．出版社 関西大学出版部	5．総ページ数 396
3．書名 造洋飯書の研究――解題と影印	

1．著者名 内田慶市	4．発行年 2021年
2．出版社 遊文舎	5．総ページ数 324
3．書名 文化の翻訳としての聖像画の変容：ヨーロッパ－中国－長崎	

1．著者名 内田慶市	4．発行年 2020年
2．出版社 関西大学出版部	5．総ページ数 488
3．書名 南京官話資料集－《拉丁語南京語詞典》他二種	

1．著者名 内田慶市・田野村忠温	4．発行年 2020年
2．出版社 関西大学出版部	5．総ページ数 661
3．書名 『華英通語』四種－解題と影印	

１．著者名 内田慶市	４．発行年 2020年
２．出版社 ユニウス	５．総ページ数 133
３．書名 言語接触研究の最前線（東西学術研究所研究叢書第8号、言語接触研究班）』	

１．著者名 内田慶市	４．発行年 2019年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 244
３．書名 『拝客訓示の研究』	

１．著者名 内田慶市	４．発行年 2018年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 360
３．書名 古新聖経残稿二種 北堂本與満漢合璧本	

１．著者名 内田慶市	４．発行年 2018年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 954
３．書名 北京官話全編の研究　付影印・語彙索引　下巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	塩山　正純 (Shioyama Masazumi) (10329592)	愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授 (33901)	
研究分担者	奥村　佳代子 (Okumura Kayoko) (10368194)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関